



# 加賀象嵌—鐙師のしごと—

銀象嵌紗綾形文鐙（銘 加州住山田永元作 江戸時代 宗桂会）

金沢学院大学美術文化学部教授 山崎 達文

## 《金沢鐙》

江戸時代、加賀象嵌の系統には、刀剣に付属する一連の装剣金工と馬具の鐙とがあって、全国に加賀の象嵌として名声を博していたのは鐙であった。装剣金具の世界には、室町期以来、日本の金工宗家として後藤家が君臨統括していて、加賀のそれも、京都から遣わされた後藤一門の支配の下に礎が築かれた。その点、象嵌鐙には多様な系譜があり、前田家が京都から招聘した家門が互いに競うなか、加賀出来は、他産地に抜きん出た技と美を醸成させていったのだと思われる。

文久元年（1861）の刷物、「加越能名物産物番付」には、金沢鐙、金沢象眼の記載が見えて、鐙がほかの象嵌の仕事とは明確に区別されていたことが解る。江戸前期とおほしい作に「加州小松住何某」などと銘をきったものも在りはするが、もっぱら金沢城下でつくられていた金沢鐙の人気は、第一には象嵌文様の見事さにあったであろう。武蔵、大和や知多などの鐙も知られる中、凜とした気品を漂わせる華麗で自由奔放な意匠は、一つ一つが異なるデザインの宝庫で、しかも洗練されたセンスは傑出している。



蔓草図鐙（銘 金沢住勝尾永次作 江戸時代 金沢卯辰山工芸工房）

### 《その特長》

加賀鐙を特徴づける豊かな装飾の世界は、全て、鉄地に多くは銀を嵌めて平滑に研ぎだす、精巧な平象嵌の技に支えられていた。馬具だから荒っぽい使用に供されるわけだけれども、叩き込んだ銀の紋金<sup>もんかね</sup>がはずれることのない堅牢な技の精度も、大いに評判なのであった。後世、たいていはサビが浮き上がらせた紋金の欠落跡を見ると、彫り込み具合の結構深いことが解る。そして、堅牢さを保つ、溝の底辺を側方向に彫り広げるアリをたてる手間を、とりわけ精確緻密に行っているのは、現代につづく技へのプライドである。

ちなみに、今は技法の区別なく“象嵌”と表記すものの、江戸期には“象眼”と書かれた。金沢での象嵌は、鐙が全てそうであるように、うがった溝に金銀を打ち込む技が専らで、<sup>やすり</sup>鑿のように、縦横に刻んだ凹凸に金銀を押し付けて文様とする布目技法は行われぬ。従って、加賀の技には、眼よりも嵌の字のほうが理には適っていると言えよう。技法一般

の表記が近代以降、象嵌として定着していった経緯を調べたことはないものの、金箔の“箔”もまた、江戸時代は“薄”と記されるのが常であったことと、同じようなところがある。

### 《意匠と技》

鐙特有の起伏の激しい凹凸面に、精緻な文様意匠を破綻なく象嵌していく技術は、見た目以上の技量が必要だったと思われる。とくに、角度をもって連続する面と面に渡って描かれる文様を堅固に象嵌していくのは面倒だったに違いない。しかし、意匠構成に厄介な表現を回避しようとする意図はまるで窺われぬ。専門画工による図案を、象嵌師は忠実に再現していったのであろうが、おそらく、彼らが画図構想の領域に関与することは無かった。

今日、作家は、自身の思い描いたデザイン構想を自らの技をもって仕上げ、他者の図案を元に完成させるなど、為すべきことではないと認識している。しかし近代以前、意匠をつくることとこれを表現す

る工人とは別の職種なのであり、どんなものづくりも分業されていた。鏡も、文板透<sup>もんいたすかし</sup>などが個別に指定された本体を春田鍛冶<sup>はるたかじ</sup>が鍛造し、これに鏡師が象嵌を施した。この折、いかなる象嵌の図案がもたらさるようとも、それが技術的に難儀な指示であるにせよ、これを肅々とまとめ上げることこそが工人としての悦びであり、矜持だったに違いない。一面、与えられるむつかしい表現技術をこなすことでしか、更なる腕を振るえる仕事には繋がらない、厳しい競争環境のあったことは想像に難くない。

### 《金沢鏡への問い》

日本の鏡がみせる特徴的な形は、鎌倉期にはほぼ固まっていたようで、以降、各地で制作されていた形姿に大きな違いがあるわけではない。その中で金沢鏡が高い評価を誇ったのは、見てきたような理由からであった。今も、思いがけない土地で加賀鏡に出会うことがあるのは、藩政期、加賀藩が鏡を格式ある献上贈遺品に充てていたからであり、それが加賀出来の自信とその名声を相乗的に高めたのであった。しかし、武家社会の終焉とともに鏡づくりは一気に消滅した。急ぎ洋才として取り入れた近代の騎馬軍装には必要がなかったからである。刀装金具同様、その象嵌の表現技法のみを、我々は細々と今日に継承している。



伊藤家白銀文書「鏡図」(石川県立歴史博物館)

鏡は、鞍<sup>くら</sup>から伸ばした力革<sup>ちからかわ</sup>で馬腹の左右に吊るされる。だから鞍とセットでつくられるものでもあり、高級な鞍は、たいてい蒔絵<sup>まきえ</sup>や螺鈿<sup>らでん</sup>で飾られる漆工の仕事であったし、鏡も鉄地に同一意匠の豪華な高蒔絵が施された。けれども、加賀金沢は蒔絵のメッカであったにもかかわらず、なぜかその遺例は無く、あくまでも加賀での鏡は金工象嵌の仕事であった。別にとりたてて理由など無かったのかも知れない。でも、そういうことだったのか！という得心は欲しいから、あれこれ考えを巡らすものの、仮説を言うてみることにできないでいる。

いや、はなしを蒔絵などに広げるまえに、多くの鏡を見ても、工人や家門の系統による傾向や特徴を

浮かび上がらせることができない方がモンダイである。それは、分業ゆえの作り手の姿の見えにくさなのか、単なる考察不足と見る眼の無さなのか。たぶん後者なのだろうから、素朴な疑問を抱え続けるなかで、象嵌鏡なっとくへの捲土重来を期してこの稿を閉じよう。



菊に蝶図鏡(銘 加州金沢住運長作 江戸時代 石川県立歴史博物館)